

令和6年度能美市総合教育会議 議事録

I 日 時 令和6年12月23日(月)

開会 13時25分 閉会 14時42分

II 場 所 能美市根上総合文化会館 2階 204会議室

III 出席者

【構成員】

市 長	井出 敏朗
教育長職務代理	徳野 伸彦
教育委員	竹本 里奈
教育委員	崎山 由樹夫
教育委員	中田 桂子

【教育委員会事務局】

管理局長、教育総務課長、学校支援課長、まなび文化スポーツ課長、ふるさと文化財課長、学校支援課課長補佐

【司会進行】

教育総務課長

IV 内容

- 1 開会
- 2 市長挨拶

(市長)

教育委員の皆様には置かれましては、常日頃能美市の教育行政にご指導を賜り、そして今日もお忙しい中ご出席を賜りありがとうございます。

能美市の教育現場では学舎の老朽化あるいは不登校等々の課題がございますが、本日は2項目をピックアップさせていただいて、お諮りさせていただきたいと思います。

一つ目はG I G Aスクールであります。本格的に始まって5年ほど経ちまして、私も現場に行きますと、タブレットを使って発表している場面の撮影をし、お互いに評価をしたり、なんとタッチタイピングができる生徒も大変増えているというのが能美市の現状です。そしてタブレットを家に持ち帰っている比率が全国的にも高いレベルであるということでの高評価をいただいていたたり、今年の元日に発生した令和6年能登半島地震の際には、災害対応にも使っていたということを聞いております。今日はこれまでの取組と、今後どうやって活用をしていくのかということを皆様にご報告させていただきたいというのが一点目であります。

そして二つ目は学校部活動の地域クラブ移行でございます。現在7つの競技が既に地域クラブへ移行しておりまして、色々な目的がある中、先生の働き方改革という意味もありますけれども、我々にとってはやはり子どもたちが真ん中にあるということを主眼において、競技力を高めるということだけではなく、健康増進、そして同級生だけではなく、先輩後輩との生涯にわたる友情を作れる貴重な場だという捉え方をしております。

能美市としてどんなことをやっているかということをお今日皆さんにご報告をさせていただいて、この機会にご意見を賜りたいなという思いであります。

忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げまして、冒頭のご挨拶といたします。よろしくお願いいたします。

3 議題

(1) G I G Aスクール構想による教育D Xと学力向上

(2) 能美市における学校部活動の地域クラブ移行について

(事務局)

G I G Aスクール構想による教育 DX と学力向上 学校支援課長が説明

(徳野委員)

今ご説明いただいた中で、災害の時のお話で、子どもたちがいろいろな心配りができることが本当に素晴らしいと思いました。災害に伴う経験ではありますが、子どもの可能性といいますか、人としての可能性、このようなこともできるんだなということを見せていただきました。学校訪問で柔道の授業を拝見したときに、クロームブックで自分の動きを撮影し、どのように動いているか自分で確認するなど、体育でこのような使い方があるんだなと感心したのですが、今の災害時のお話であるとか、保護者の方も興味をもっておられることですか、違う面から本当にいいお話を聞けて良かったと思いました。

学力調査に関して、G I G Aスクールの様々な取り組みがイコール学力向上の成果に直接繋がったという判断をされているのでしょうか。私としてはある部分においては100%であるが、そればかりではない部分もあり、必ずしもイコールではないと感じました。

また、例えば毎日パソコンを使っていると、いざ手書きの時にちょっとした漢字が出てこない、ということがあるのですが、子どもたちがそのようなことのないように、ハードの部分とソフトの部分、先生方も使い分けて両方ともしっかりと学力向上できるようにぜひ今後もお願いしたいと思います。

(学校支援課長)

ありがとうございます。学力向上に関しましては、今委員がおっしゃったように、100%因果関係があるとは考えておりません。複合的に効果はあったであろうと捉えております。

例えばデータ利活用的な点については、おそらくG I G Aの成果があったと考えております。つまり、G I G A端末を使いながらインターネットで調べたり、データを取ったり、それを分析したり、統合させて考えるということはこれから求められる学力の一つでありますし、国もそのような授業を作っていくことを期待しております。よって、このデータ利活用において成果が出始めてるということは、G I

G A端末を使っている成果でもあるのではないかと考えております。知識が子どもたちに一斉に定着する教授型の授業でも効果があるでしょうし、子どもたち同士の対話型、貴方の意見を踏まえて、私の意見はこうですというような授業でも効果があると考えます。

また、チャットによる複数人での意見交換も当たり前の時代になっていくということで、今後社会人になっても役立つスキルを習得できます。

今後の学力調査の結果によっては、端末の活用度の高さが成果として表れているということも言えるかと思います。ただし、全国的にもG I G A教育が重要であるとの認知が高まっておりますので、みんながそれに対応してくると、学力調査にも影響が出てきますので、平均点とばかり比較するのが辛い点もございます。

(崎山委員)

学校現場を回っていると、ほとんどの教科でクロームブックが活用されていることがわかります。

例えば先ほど徳野委員がおっしゃった体育の授業で、模範となる動きを調べることができる、また子どもたちが互いの動きを撮影し合って改善点を一緒に考えることができるなど、昔はできなかったような、本当に夢のようなことができるようになり、とても効果的だと思います。

国語の授業でも、文章を電子黒板に映して、先生がどんどん書き込んで子どもたちに考えさせる。子どもたちも自分のクロームブックの中で自分の考えを記入する。それを先生が電子黒板に映して、みんなで共有して理解を深め合うなど、かなり効果的な活用をしていることを本当に実感しております。

ただやはり課題はあると思います。一つは文科省の方針、誰1人取り残さない授業をということで、個別最適化あるいは地域によっては授業進度という言葉が出てきておりますが、授業そのもののあり方を考えながら、クロームブックの活用とうまく兼ね合わせていただきたい。

クロームブック活用は本当にどんどん進めていただきたいのですが、先生の授業力そのものもしっかりと検証して、力をつけていきたいと思います。

先日ある学校の授業を見ていたら、子どもたちに考えさせる授業の中で先生が「ヒントはクロームのなかにあるよ」と言い、それを聞いた子どもたちがどこに答えが

かいてあるのかな、と探し出すような場面がありました。

子どもたちが思考するためのベースとなる知識はやはりしっかり抑えたうえで、どこを考えさせるのかということをもう少し明確にした授業づくりがあるといいかと思います。それからいろいろな考え方ができるけれども、先生がそれをどのように本時の狙いに向けて練り上げていくのかというところも頑張っていただけたらと思いました。

クロームブックを活用しながらしっかりと授業を深めていくというのは以前からの課題ですが、教育委員会として、ぜひそういう形でも指導していただければということをおもいました。

意見として申し上げます。

(学校支援課長)

ご意見ありがとうございます。その辺りしっかりとバランスをとって、教育委員会としても、学校の支援をしてまいりたいと思います。

(中田委員)

リーディングDXスクール事業の公開事業を見学させていただいたときに、普段教室への登校が難しい子がいきいきとして授業に参加している姿が印象的で、個別最適な学びができる一つのツールとして本当に活かされていることを感じました。

お聞きしたいこととしては不登校の子へのリモート授業などの体制はどのようなになっているか、また今後端末を更新する際は端末自身で更新するのか、OSで更新するのか、その辺りどのようにお考えですか。

(学校支援課長)

ありがとうございます。

まず不登校の子どもに関してですが、保護者と本人が希望されれば教室とつないだオンライン授業を行っております。ほぼ毎日受けている子もおりますし、時々オンライン授業を受ける子も入れるとかなりの利用数になります。また、教育センターのふれあい教室でも学校の授業と繋いで、オンライン授業を実施している実績がございます。今後も本人の希望により実施していき、そこから登校へのステップに

繋がるのではと考えているところです。

今後の端末の更新についてですが、現在、国からの補助金が出ており、来年度から2～3年かけて端末自体で更新します。OSについては継続してクロームOSを使います。石川県の共同調達会議で、他自治体の皆さんと協議をしているところです。

(事務局)

能美市における学校部活動の地域クラブ移行について 学校支援課課長補佐が説明

(崎山委員)

例えば能美市のある競技のクラブでは、子どもたちの所属はクラブですが、大会には学校名で参加しています。このように地域で活動して、学校名で大会に出場できるという形がベースになってくるのではと考えているのですが、只今の説明ではその辺りの言及はありませんでした。

部活動地域移行の完成形について、国も含めてどのように考えているのか、今後の展望等がありますか。

(学校支援課課長補佐)

展望としまして、令和7年度末に向けて休日の部活動の移行をまずは進める、ということになります。

将来的には、学校から部活動が完全に無くなることになるのかもしれませんが、現時点では「令和13年度までに休日の部活動を地域へ移行（展開）することが示されています。この点が一つ大きなポイントであると考えています。国に従った形で、まずは進めてみようということで、今後検討を重ねることになると考えております。

明確なことをなかなかお示しできないのですが、現時点では休日の部活動の移行が目標になるとお考えいただければと思っております。

(崎山委員)

学校部活動の、地域での活動を増やしながら、地域と学校の活動とを別にしていくということでしょうか。この場合、一つ気に掛かるのが、平日に学校で部活動をして、休日に地域クラブで活動をして、ということになれば子どもたちの負担が増えるのではないかという点です。

(学校支援課課長補佐)

その点につきましては、同一種目の部活動と地域クラブを合わせて、週5日以内の活動にする、という方針を設けています。平日に1回、休日に1回必ず休むこととなります。学校の健康的な運動の方針に従い、運動と休養の確保という面を特に意識していただいております。

場合によっては平日に活動ができず休日だけの活動になる、あるいは土日とも活動し平日は少なめという可能性はありますが、基本的に週5日以内の活動というところは大事にしたいということで、ふるさと振興公社についても、この方針でお願いしております。地域クラブについても同様です。

(徳野委員)

1年半ほど前に県内の教育委員の会合で聞いた話です。震災前ではありましたが、能登地域は金沢・小松に比べるといろいろな面で不利な状況で、部活動地域移行のことをまだ考える余地がないというようにおっしゃっていました。

能美市が近隣に合わせる必要は全くないと思っておりますが、他自治体も同様な課題を抱えており、国が方針を示していない中で、どこも同一の進捗になるのかな、という疑問が湧いたのですが、いかがでしょうか。

(学校支援課課長補佐)

10月に県内の担当者会があったのですが、様々な情報交換の中で、県内でも能美市は部活動の地域移行が進んでいる方です。他の自治体も少しずつ進んでいると聞いております。ただ、大きな自治体では、一つの方向性を示すことがとても難しく、進めるのが厳しいという話も聞きました。能登地域の中でも、部活動地域移行が進んでいると自治体もあります。この自治体は令和7年度末に学校から完全に

部活動をなくすという方針を掲げました。もしうまくいかなければ、もう活動をし
ないという形だそうです。

令和7年度末までに人材を見つけるのはなかなか難しいことですので、先ほどの
説明では令和8年度以降の具体的なことについてはあえて触れませんでした。地域
の人材確保がとても難しく、近隣の自治体も苦勞をされており、我々の方にどうやっ
ているかという問い合わせもあります。

能美市としては、ふるさと振興公社が母体になってくださることがとても大きく、
ここでうまく安全安心な部活動運営体制を確保していただいて、その上で我々がど
うコーディネートして学校とつなぐか、この辺りを働きかける必要があるなとは思
い、対応を考えております。正直なところ、どこも大変苦勞しております。

(徳野委員)

そうですね。それから、先ほどの説明にあったコーディネーターの方の役割と
いうのは本当に多岐にわたりますね。

(学校支援課課長補佐)

はい、本当に大変です。我々が今コーディネートをしておりますが、なかなか難
しいなと思っております。

(徳野委員)

我々もかつて部活動でいろいろな方との交流であったり、学校以外の部分でも
様々な形で学ばせていただきましたので、部活動が非常に大事なことだなというの
は重々承知をしております。しかし、時代の変化にもある程度対応していかなくて
はならないのということも思いますので、今後を考えて行く中で、課題が非常に多
いと感じます。

(崎山委員)

私も学校部活動というのは非常に大切な日本の文化だと思っております。本当に
大事にしてほしいと思う一方、いままで通りの運用では難しい社会になりつつある
というのも現実です。

学校の中では、部活動を一生懸命やりたい先生もいるのであらうと思います。できればそういう方々が今後とも意欲をもって活動できる場所も残していけたらと思います。

(学校支援課長)

ありがとうございます。学校支援課として全体的なお話を一つよろしいでしょうか。

今ほど課長補佐が回答した通りですが、部活動のあり方検討委員会をこれまでも開催し、令和7年度までに休日の部活動に移行することについて、国の方針に則って取り組んでまいりました。

令和8～10年度、次の3年の目標についても、国の動向を踏まえながら我々能美市としても動いていきたいと考えております。

来年度は部活動あり方検討委員会を再度立ち上げさせていただき、国の動向を見ながらどのようなスタイルが能美市にふさわしいのか、まちづくりにも関係してくるような大きなことですので、その辺りを見据えながら、本日委員の皆様から頂いたご意見をもとに、協議してまいりたいと思います。またその都度お知らせをしてまいりたいと思っておりますので、引き続きよろしくお願いいたします。

(司会進行)

委員の皆様、貴重なご意見をいただきましてありがとうございました。それでは市長から、全体を通したご意見をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

(市長)

まずは、大変深掘りした貴重なご質問ご意見を頂きましてありがとうございます。GIGAスクール構想に関しましては、成果をどのような数字で見るか、項目で見ていくかというところなのですが、能美市では先進的な色々な取り組みをやっていることであると思うのですが、今日見ていただいたような友達を思いやる気持ちを、端末を使ってやれることになりました。

それから、能美市ではデジタル公民館ということで公民館を使って多世代間の交流を促進していこうということをやっております。例えば高齢者が公民館に来て、ふれあい教室やスマホ教室をやっている、そこにWi-Fiを使った勉強をしたい

という子どもがタブレットを持ってやってきて、お互いが交流できるような、そんな仕掛けを作れないかということをしております。

それから今、電子図書館用の本を積極的に購入させていただいておりまして、タブレットを使って本を読む子もたくさん増えてきているというようなことから、決して学力テストの点数だけではなくて、多方面にわたってタブレットを持つてるといふことの成果が出るよう全庁挙げてとりくんでいきたいと思っておりますので、ぜひ引き続きのご支援を頂ければと思います。

それから地域部活動でありますけれども、それぞれの委員さんもいろいろな思い入れがあるのではないかと思います。特に崎山委員は、弱小バスケットボール部を全国レベルのチームに育て上げられた名手でして、私の恩師でもございますけれども、そういった方であります。

ただ、部活動が置かれている状況というのは、競技力を高めたい、勝ちたいという生徒もいれば、家に帰るまで何か運動したいというような生徒もいらっしゃるし、部員数が減少することに伴いまして、最上級生だけでチームを作れない競技もあつたりということで、まさに二極、三極化しております。これにどうやって取り組んでいくかということがまさにこの地域部活動への移行でございます。何しろ真ん中にいるのは生徒ですので、生徒を思いやりながら地域クラブの移行を進めていきたいと思っております。それぞれ豊富な経験がある皆様におかれましてはぜひここに関しましてはご指導ご鞭撻や、あるいはコーディネーターになっていただくなど、ぜひご協力を賜りますことをお願い申し上げまして、総括とさせていただきます。今日はどうもありがとうございました。

4 閉 会